

## 情報・経験を基にした主体的な学びを目指した活動

### ーリテリングと自由英作文の実践を通してー

外国語(英語)科 川上佳則、宮本真衣

本稿は、2019年度に本校で開催した「高校教育シンポジウム」の第2分科会(英語科)発表の最終的なまとめである。英語科は、本校の研究テーマ「学びの喜びから広がる力」の育成に向けた取組として、統合的な技能の伸長に寄与すべく「情報や経験を積極的に活用する取組」を授業実践に盛り込んでいる。今回、第2学年はリテリング活動をより主体的な表現活動へと高める実践を行い、第1学年は自由英作文活動を通して、情報発信能力の向上を目指した。リテリング活動では、自分の言葉を大切にしながら表現をし、力をつけていこうとする生徒の姿が見えた。また、自由英作文実践では、英語の流暢さの伸長を期待させるデータが得られた。

<キーワード> 主体的な学び 統合的な言語活動 リテリング活動 自由英作文指導

#### 1. はじめに

平成30年に告示された学習指導要領の総則においては、「情報を精査して考えを形成」すること、「問題を見いだして解決策を考え」たり、「思いや考えを基に創造」に向かう過程を重視すべきことなどが示されている(第3款「教育課程の実施と学習評価」)。いわゆる4技能についてはこれまでも総合的な学力の伸長を図ってきたところではあるが、大学入試の改革が迫る現在、思考力・判断力・表現力を高めるためのなお一層の主体的・対話的な学びが必要となっている。

また、本年度より本校の研究テーマの中で核としている「これからの時代を生きるための資質・能力」の具体として、英語科は、「英語を媒体とする情報に主体的にかかわり分析・理解し、他者に積極的・効果的に発信していくことのできる総合的な力」と設定し、「読む・聞く・書く・話す」をそれぞれ独立した技能としてではなく、相互に関連しあったものとして考え、それらを統合した言語活動を行うよう心がけている。このような理念の下、最終的には「学びに向かう力」、本校の研究テーマ「学びの喜びから広がる力」の育成を目指している。

このような考えに基づく実践の例として、情報に対して「見方・考え方」をもって主体的に関わるリテリング、自己の周りの問題を発見する力をテーマとした自由英作文について実践した活動を報告する。

#### 2. 実践例1 第2学年 リテリング活動(主担当:宮本)

##### (1) 研究の背景及び目的

「インプットとアウトプットの質の向上」「4技能の向上」「生徒の主体的な学び」という3つの観点を目標に掲げ、現在の2年生はリテリングに取り組んできた。リテリングは「ストーリーを読んだ後に原稿を見ない状態でそのストーリーの内容を知らない人に語る活動」(卯城 2009)であり、「理解」「再構築」「伝え合い」が一体となった活動である。4技能を統合的に発展させる方法としても一般的に理解さ

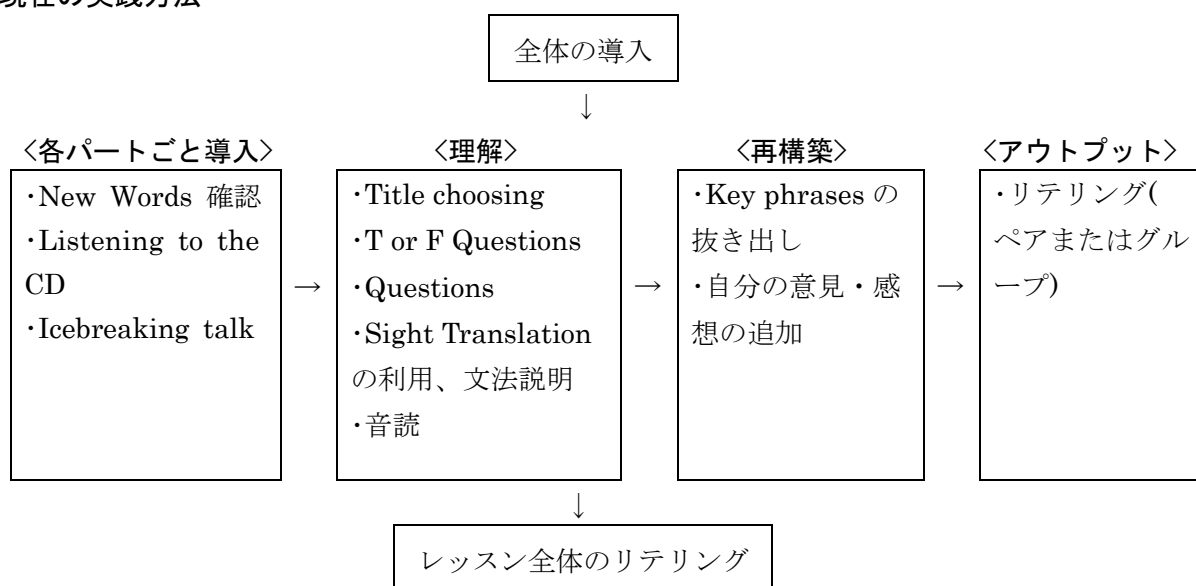
れており、どう組み合わせるかによっていくつかのパターンの活動ができるのもこの方法の特徴である。卯城(2009)は以下の6つのパターンを挙げている。

O-O	教師がテキストを口頭で読み上げ(O)、その内容を学習者が口頭で再生する(O)。
W-O	学習者がテキストを読み(黙読または音読) (W)、その内容を口頭で再生する(O)。
O-M-O	教師がテキストを口頭で読み上げ(O)、その内容を(教師または学習者が)図式で表し(M)、学習者が口頭で再生する(O)。
O-M-W	教師がテキストを口頭で読み上げ(O)、その内容を(教師または学習者が)図式で表し(M)、学習者が筆記で再生する(W)。
W-M-O	学習者がテキストを読み(黙読または音読) (W)、その内容を図式で表し(M)、さらにそれを口頭で再生する(O)。
W-M-W	学習者がテキストを読み(黙読または音読) (W)、その内容を図式で表し(M)、さらにそれを筆記で再生する(W)。

\*O=Oral W=Written M=Map

本学年ではW-M-WもしくはW-M-Oのパターン、そしてW-M-W-Oのパターンで実施している。加えて独自のやり方として力を入れているのが、教科書の内容を自分の主観・意見を含めたものとしてまとめていくこと、そして教科書の表現だけにとらわれずに自分の言葉でまとめ上げるという部分である。

## (2) 現在の実践方法




Lessonごとのリテリングは回収して教員はチェックするが、添削指導は一切せずに内容のみに注目して生徒の良い点をフィードバックする。

(3) 生徒が作成した実際のリテリング例

**[Your opinion]**

Part1 を読んだあなたの感想を、英語で1文以上書きましょう。

パートごとのリテリング

 I thought I want to get a job that I can love and could use that I'm good at just like Steve Jobs and Chanel.  
Such as smart phones & table PC.

**[Memo]**

In this part, there is two innovators who achieved great success in their own industry. Steve Jobs, an American leader in the IT industry, introduced many innovative products. His success to keep introducing those products was to do that he loved. Another innovator Coco Chanel, in fashion industry, produced many dresses that she actually wanted to wear. She achieved great success just like Steve Jobs.

**[ Memo ]**

The cleaning staff in Tokyo Station's speedy and skillful work surprises people.  
They have only seven minutes to work. ←  
They do 9 missions during this time. They called Tesser. And their work was called "Tokyo's Seven-minute miracle". Its features are speed and skillful performance. They were success in Japan. There are two reasons. First Japanese keep the places around them clean. Second, staff's pride in their career. It produce the their miracle performance.



不潔の上で使えない。



2> 清掃員が綺麗にする First & Secondに使う清掃員!



レッスン全体のリテリング

(4) アンケート結果

2019年7月と10月アンケートを実施した。7月は設問1~3の質問項目に関する自由記述式アンケートを、10月は設問4~9質問項目に関するアンケートを2年の全クラス(計195名)を対象に実施した。設問1~3は、各生徒の記述内容に表れていた主な内容をまとめたものである。複数の事項が抽出された回答、また、逆に該当事項が含まれていなかった回答もあるため、右端の回答者数の合計は生徒数とは一致しない。

設問1 リテリングをしていて、難しいと感じるのはどんなことか

自分なりの文章を考え出すこと／文章の組み立て／伝えたいことをうまく英語にすること／自分の言葉で書き直すこと	51
文章をまとめること／短く簡潔にまとめること	35
単語・文法力の問題、英文が作れない	24
重要なフレーズを抜き出すこと／どこが重要か判断すること	12

内容を覚えること／原稿なしで話すこと／単語やキーワードだけでリテリングすること	17
自分の意見・感想を述べること／自分の伝えたいことを厳選すること	10
本文の内容をきちんと読み取ること	5
効果的に伝えること／発音など	4

## 設問2 リテリングをするとき、何を意識しているか

なるべく簡潔に／相手に伝わるように分かりやすく／思ったことを上手く伝えられるように	49
本文をそのまま使わず、知っている単語や習った表現を使い、なるべく自分の言葉で	43
重要な部分、キーワードを探す／必要な部分を取り出す	12
相手を見る、アイコンタクト	8
自分の意見・感想を書くようにしている／言いたいことをまとめる	6
もとの文章の内容をしっかりと理解すること	4
自分が書いた文の文法が正しいかどうか	4

## 設問3 リテリングの活動中は、何を大切にしているか

相手に分かりやすく伝わるように、伝えるように／話し方・声の大きさ・発音	60
相手をよく見る／なるべくメモを見ないで	43
相手が言っている内容をよく聞く／自分のリテリングとの内容の違いを考える	15

## 設問4 リテリング活動において、次の項目で何を一番意識しているか

- ① Reading 13.9%
- ② Writing 54.4%
- ③ Speaking 22.2%
- ④ Listening 6.7%
- ⑤ 未回答 2.8%

## 設問5 教科書の内容を読み取るとき、自分がリテリングで話す内容を考えながら読むか

- ① はい 32.6%
- ② いいえ 67.4%

## 設問6 リテリングの内容を考える時に、単語集で覚えた単語や授業で習った表現を使うことを意識するか

- ① はい 59%
- ② いいえ 41%

## 設問7 1年生と2年生でのリテリング活動を比べて、自分の中で取り組み方・気持ちなどに変化はあるか

- ① はい 56%
- ② いいえ 44%

## 設問8 音読練習をするときに、リテリングを意識するか

- ① はい 18.6%
- ② いいえ 81.4%

## 設問9 リテリング活動で、今「もっとできるようにしたい」と思っていることがあれば、それは何か

- ① 回答あり 90.6%
- ② 回答なし 9.4%

#### (5) 考察 —現在の状況と今後の展望—

アンケートの設問1の回答から、リテリングにおいて「自分の言葉で書くこと、自分なりの文章を考えていくこと」に難しさを感じている生徒が最も多かったことが分かる。また、単語・文法力の問題、英文が作れないと答えた生徒も多数存在したが、これは生徒自身が自分の言葉で表現しようとしているからこそ感じている難しさであるように思う。これらの点から、ライティングにおいては、summaryとは違うリテリングの本質部分を生徒が理解した上で取り組むことができていると判断できる。一方で、設問3の回答に注目すると、作成した内容を伝える際に大切にしている部分が、「話し方・声の大きさ・発音」という外面的な部分や、「なるべくメモを見ないで」というような暗唱活動との区別が十分にできていない生徒の実情が見えた。これらを改善していくためには、リテリング活動の中でよりオーラルに焦点を当てた指導法を取り入れていき、口頭で伝える際には、暗唱とは異なることを明確にするような説明していく必要がある。

設問4の回答から、ライティングを意識している生徒が半数以上であることがわかった。それに対し、リスニングを意識している生徒は1割にも満たなかった。現在のリテリング活動の流れでは、ペアワークもしくはグループワークの際に相手のリテリングを聞くという活動を取り入れているが、その活動内で単純に聞くだけで終わらせないような指導の工夫が必要である。設問8の回答から、音読練習とリテリングはリンクしていない生徒がほとんどであることがわかった。しかし、音読は英語学習には欠かせない活動である。音読によって内容を頭に入れ、リテリングにおけるスピーキング活動に活かしていくことができるように音読練習を充実させていかなければならない。

そして、設問9の回答から9割以上の生徒がリテリング活動の中でそれぞれ目標を持って取り組むことができていると分かった。回答で多く見られたのは「本文と違った形で自分なりの表現で書きたい」「色々な表現を取り入れたい」「語彙を増やしたい」「上手く文章を構成できるようになりたい」といったものだった。リテリング活動は1年次から継続して行っているが、アンケートの中では「英文を自分らしく書くようになった」「本文の内容をまとめ、自分の意見を言うようにしている」という自分の意志の伝達に意識を向けている回答が多く見られた。その証拠に、1年生よりも「自分の言葉」を意識している生徒は43.5%に上り、「自分なりの表現」を今後の目標に挙げている生徒は50.8%に上った。このことから生徒がこれらの目標を達成していくことができるよう授業を行っていくことが、生徒の主体的な学びを育てていくことに繋がると考える。

#### (6) まとめ

リテリングにおいて最も魅力的な点は、自分の観点で自分なりにまとめ、そして伝えられるという点である。summaryでは個々の見方や気持ちを入れることはできないが、リテリングでは主観が入っても良い。多くの生徒は様々な教科を学習していく中で、常に「正しい答え」にたどり着こうとする。そのため、他の生徒と違う答えを持つことに対して臆病になる生徒も少なくない。しかし、リテリングは考えた内容が一人ひとり違って良いものであり、むしろその違いを楽しむことができるため、生徒には自分が伝えたい内容や気持ちを優先して活動に取り組んでもらいたい。現在のところ、教科書のLessonを軸にして内容を作っているが、今後は一人ひとりの個性や主体性がより反映された活動になるよう、教材面などで多様性や独自性を尊重し、オリジナリティをより発揮しやすい形を模索しながらリテリングを継続していきたい。

## (7) 参考文献

卯城祐司(2009)『英語リーディングの科学―「読めたつもり」の謎を解く―』研究社  
高等学校学習指導要領(平成30年告示)

## 3. 実践例2 第1学年 自由英作文活動(主担当:川上)

### (1) 研究の背景及び目的

昨年度の授業研究として、「問題発見能力の育成」と「発信力の向上」に向けて、本校第3学年1クラスを対象に1年間自由英作文指導を行った(川上, 2018)。自由英作文のテーマ決めを毎回生徒自身に委ね、生徒間の相互添削とアウトプット活動を中心に据えたもので、より主体的な取組になることを期待しながら、教師にとっても持続可能な指導として「英作文の内容の添削をしない」点に特色を持たせた試みだった。生徒英作文や意識アンケートからは、生徒の英作文表現活動に対する自信の高まりに加え、一部表現力の多様化や語彙・語数の増加を期待させる結果が得られた。また、半年間のデータを分析することで、生徒が持つ関心事の広がりや傾向が見えた。

この結果を踏まえ、1年次からの継続的な取組として、あらためて本実践をスタートした。多角的な観点(語彙力、語数、流暢さ、テーマの選び方等)から、生徒の英語発信力の向上と主体的な問題発見能力の育成を目指すことが主たる目的である。

### (2) 研究対象

本実践の対象生徒は、高校1年生で英語表現I(3単位)を受講する2学級80名(男子28名・女子52名)である。当該クラス生徒の英語の学力は、上位者・下位者の数が少なく、中位層に厚い分布となっており、本学年の中でみても中程度と言ってよい。なお、明るく元気のよい生徒集団で、学力に関わらず、英語学習に対する意欲・関心は比較的高い。

### (3) 指導実践期間

今回の指導を実践する期間は、2019年4月初旬から、2019年3月までである。なお、本自由英作文指導研究は現在の研究対象学年が卒業する2021年まで継続予定である。

### (4) 先行研究

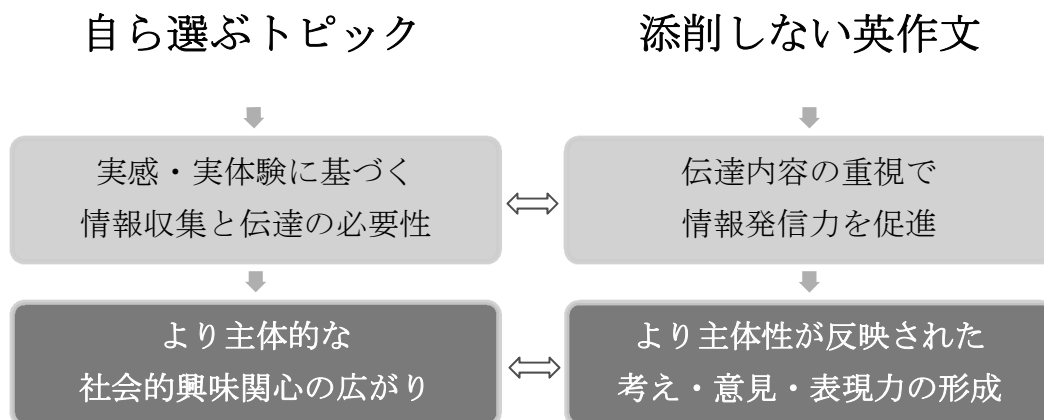
Bonzo(2008)をはじめとしたEFL学習者の自由英作文に関する多くの先行研究から、教師が与えるより生徒が自らトピックを選ぶ方が、その英作文の量・質(流暢さ)・取組の姿勢ともに良好な結果が期待できると概ね考えられている。その子細(例えば「流暢さとは何か」など)については引き続き議論の余地があるにせよ、本研究は一定の効果は確かにあると示した先行研究の結果を始点としたい。今回「教師が与えるトピック」と「生徒自らが選んだトピック」を比較して検証するのではなく、先行研究に従って有効と考えられる指導法(生徒が自ら選んだトピックを英語で書き続ける)でどのような変化・影響があるかを考察することを主旨とする。また、国内における先行研究の多くは大学生を対象としており(e.g., Sowter and Parrish, 2013; Ferreira, 2013; Dickinson, 2014; Takinami, 2018)、高校生に関する研究は数が少ないこともあり、Head(2016)を参考にしつつ、高校年代のEFL学習者にはどのような影響があるのかを考察する。また、対象学年が変わっても、彼らの興味関心の幅や社会に向けた視野の広がりが見られるかについて、昨年度の研究(川上, 2018)と比較検証する。

## (5) 仮説提示

昨年度とは異なる学年を対象とし、年間授業計画、実践数を昨年度の半分以下で行うことから、単年で大きな成果を得るのは難しいと考えている。しかしながら、過年度の反省を活かした授業のアプローチ、2nd ライティングやフィードバックの工夫により、一定の正確性を保障しつつ、語数・語彙力・表現力ともに伸長が見られる可能性は大いにある。また、テーマ選びについても、自分たちの周りだけでなく、少しずつ広い世界に向くような視野の広がりにつながる結果を得られると考えている。あらためて提示すると以下のような仮説となる。

生徒が自ら選ぶトピックで書く自由英作文を、彼らからのメッセージとして応答する（教師が添削せず、リプライやコメントのみを付す）ことで、生徒の英作文活動への意欲は高まり、語彙や表現力は自ずと伸長する。また、活動で伝達する情報を生徒自ら探し続けることで、彼らの関心は、自分の身の周りのことから、やがて現在の社会の状況、諸問題へと広がりを見せる。

### <仮説における生徒に期待する変容のイメージ>



## (6) 実践方法

### 1) 実践の手順

本研究では、研究対象のクラスの英語表現 I の授業において、各チャプターの終わりに、身の回りの出来事について自由英作文を書き、グループ内で発表する活動を実施する。なお、「身の回りのこと」とは個人的な話題から、国際的なニュースまで興味関心があれば何でも可とし、その元となる媒体も、テレビのニュースをはじめ、インターネット、携帯、新聞・雑誌など、自分が見聞きした情報全般を認めている。

### 2) 指導上の工夫

#### ①実際の活動内容

本実践における生徒の活動はグループ活動（4人／グループ）を主として行う。活動内容は「1st ライティング」、「相互評価・コメント（ピアチェック含む）」、「2nd ライティング」の3段階に分けている。まず、配布したワークシート（図1）に、個人で「気になる身の回りの出来事（以下、トピック）」を4文程度の英語を目標に、5分間で書く。なお、自分の英作文には内容のサマリーとして必ずタイトル（見出し）を付けるよう指導する。次いで、グループ内で全員が順に口頭発表した後、ワーク

シートを読み回して相互に実際の文面をチェックし、気になるところやあきらかな誤りがあれば、指摘を加える。一言コメントを英語で残し、3段階評価をつけて本人に返却する（10月以降は評価を「語彙」、「文構成」、「興味関心」の3観点で実施）。最後に、本人は評価やコメント、指摘などを確認したら、もう一度同じ（あるいは修正を入れた）英作文を書く。以上の活動を計15分程度かけて行う。

図1（実際の生徒英作文と活動の3ステップ）

①1st ライティングを5分間で書き上げる

※最少のサマリーとしてタイトルをつける

②グループ内評価（3観点）とコメント

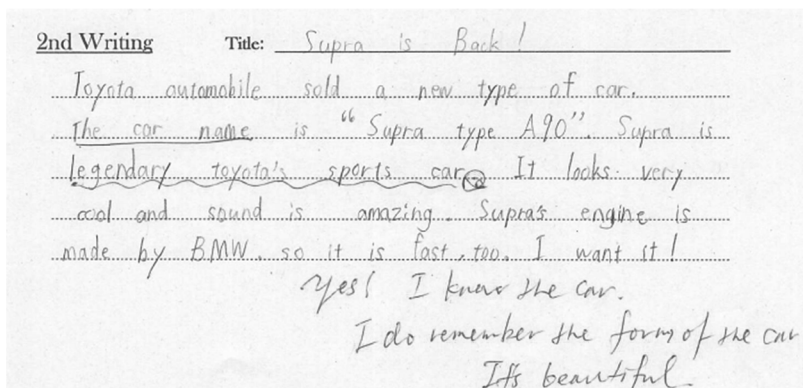
※評価と平行してピアチェックを行う

③最後に2nd ライティングを書く

②最小限のフィードバック

彼らが書いた英作文のワークシートは、グループ毎でまとめて提出することになっている。提出された英作文は、Semke (1984)等による、教師の直接的な英文添削が必ずしも生徒の英作文活動を促進しないと主張を参考に、彼らの文法や語彙に誤りがあっても、原則添削をせず、「内容についてのコメントのみ」を付して後日返却する。その誤りによって文意がほとんど伝わらないようなレベルのものについてのみ、赤で下線を引く程度である。（図2）これは、あくまで生徒自身による気づきを促す程度に留めておき、その変容の度合いを測る狙いと合わせて、本実践を教師にとっても持続的に実施できる形式として提案するものである。なお、コメントの対象は2nd ライティングのみである。

図2





## (7) データ収集と分析の方法

### 1) 生徒英作文ワークシート

(6)の2)の①で示したように、A4のワークシートを1枚使って活動したものを回収し、全てPDFで保存し、アーカイブ化する。後に、トピックの内容、語彙や表現の変容について検証する材料とする。また、サンプル数を十分に確保し、使用された英語の「流暢さ」の変容についても分析したい。なお、「流暢さ」自体についての議論は様々あるが、Bonzoが語彙の複雑さ(Lexical Complexity)を測るCarroll(1967)の指標(The total number of different words / The square root of twice the total number of all words)は“a measure of fluency”としても使えるとする主張に基づき、今回は「語彙の幅(The number of Unique/Different Words)」と「語数(Total number of Words)」を「流暢さ」を検証する観点としたい。

最後に、「取り上げたトピック内容」については、全ての生徒が書いた全英作文を分析対象をとし、大量のデータから、彼らの興味関心と問題意識の方向性、そしてそれらの推移を探る。今回、トピックを7つのカテゴリー(News, Cases, Entertainments, Sports, School Issues, Friends & Families, News about me)に分類して分析する。

### 2) 生徒意識アンケート

2019年5月と10月に、以下の6項目(図3)について4択式の記名式アンケートを学年の全クラスを対象に実施する。Q.6については、12月に、研究クラスを対象として「どんな力が付いたと思うか」と別途問い直している。

図3

- |      |                                       |
|------|---------------------------------------|
| Q. 1 | 身の回りのニュースや時事問題について関心がありますか。           |
| Q. 2 | いくつかの身の回りのニュースや時事問題を、日本語で人に伝えられますか。   |
| Q. 3 | 今、目で見たり、聞いたりした身の回りのことを、簡単な英語で表現できますか。 |
| Q. 4 | 授業中に「英語を使えた」と感じることはありますか。             |
| Q. 5 | 授業中のグループ活動についてどう思いますか。                |
| Q. 6 | 授業を通じて、どんな力を身につけたいですか？*複数回答可          |

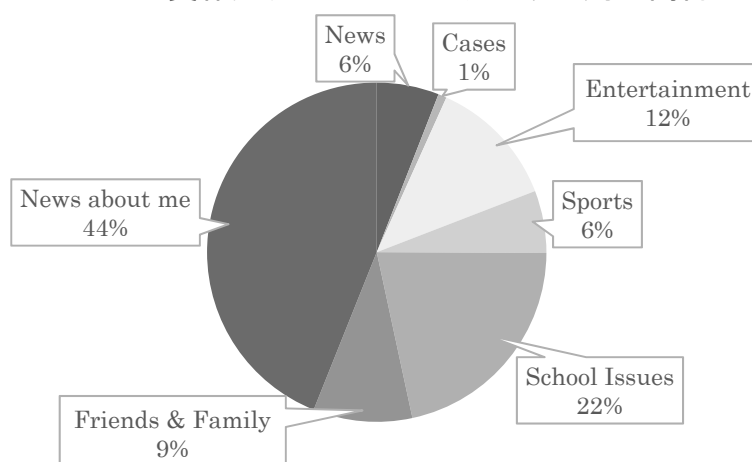
## (8) 結果

### 1) 生徒英作文分析

まずは、彼らの英作文タイトルの変遷から、彼らの社会に向けた興味関心の広がりを見る。前回の研究(川上, 2018)に引き続き、(7)の1)で示した7つのカテゴリーでは、NewsとCasesがより社会的な関心の広がりを示すものとして考えた。全10回分(約400題)を集計した結果が、以下の図4である。

図4

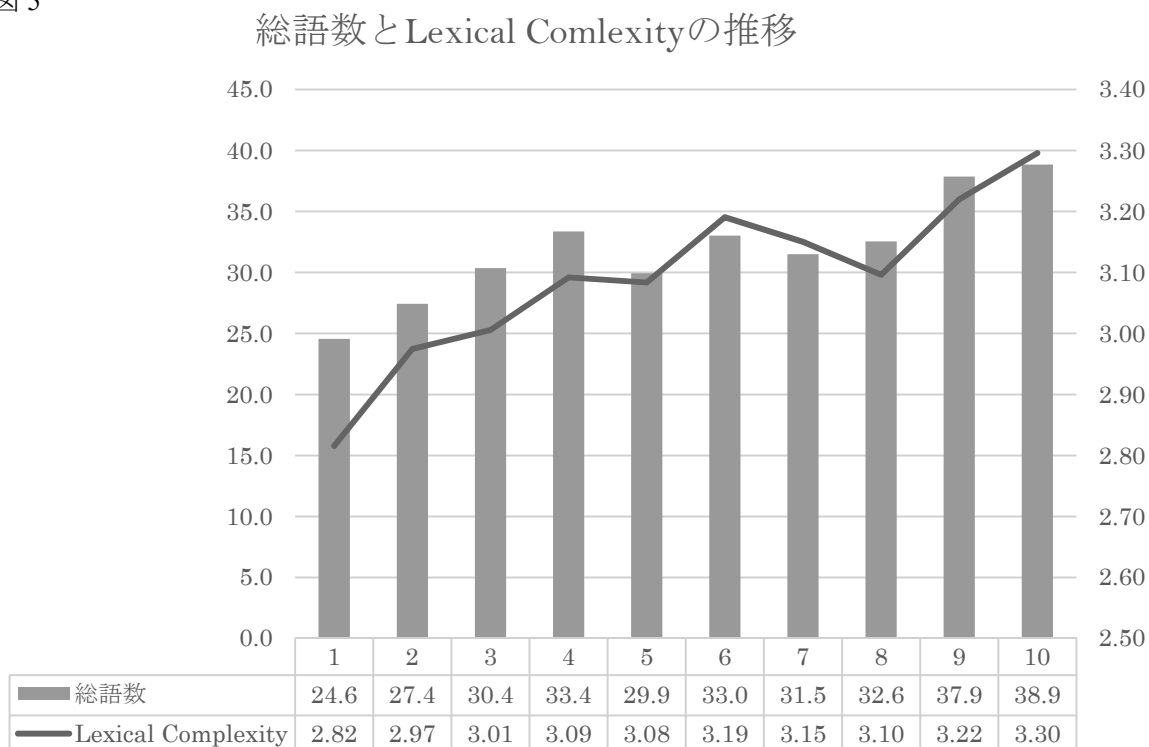
英作文タイトル：カテゴリー別の割合



一番多いのは、News about me が 5 割弱、次いで School Issues が 2 割程度を占めた。News は 6%、Cases は 1%と、合わせてもわずか 7%にとどまった。実際、視点も出来事も I を中心に文章を組み立てる生徒がほとんどであり、自分に直接関わりのない社会への関心は低く、客観的な視点からのトピック選びまではなかなか到達できない作文が大半を占めた。

次に、Lexical Complexity を用いて英語の流暢さの変容を見てみる。総語数と Lexical Complexity の推移をグラフ化すると、わずかではあるが、語数と流暢さについて、伸長の様子が見て取れる。(図 5)

図 5



総語数平均は 24.6 語から 38.9 語へと推移し、およそ 14 語以上の増加、つまり 1、2 文程度多くかけるようになった。使用する語の複雑さを示す Lexical Complexity についても、2.8 から 3.3 と右肩上がりに伸びた。先行研究において、Third Semester のドイツ人 EFL 学習者の平均値が 3.5~3.8 を推移している (Bonzo, 2008)ことを考えると、日本の高校 1 年生としては健闘しているのではないだろうか。

## 2) 生徒アンケート分析

2019 年 5 月と 10 月の 2 回にわたり生徒の意識アンケートを実施した結果が以下の図 6 である。

図 6

### Q1. 身の回りのニュースや時事問題について関心がありますか。 ※数値は 5 月→10 月の順

- ① ある 21% → 16%
- ② どちらかといえばある 53% → 53%
- ③ どちらかといえば無い 19% → 25%
- ④ ない 7% → 6%

### Q2. いくつかの身の回りのニュースや時事問題を、日本語で人に伝えられますか。

- ① 自信を持ってできる 16% → 16%
- ② なんとかできる 64% → 58%
- ③ なかなかできない 17% → 21%
- ④ まったくできない 3% → 5%

- Q3. **今、目で見たり、聞いたりした身の回りのことを、簡単な英語で表現できますか。**
- |                |           |
|----------------|-----------|
| ① できる          | 11% → 7%  |
| ② どちらかといえばできる  | 45% → 41% |
| ③ どちらかといえばできない | 36% → 42% |
| ④ できない         | 8% → 11%  |
- Q4. **授業中に「英語を使えた」と感じることはありますか。**
- |              |           |
|--------------|-----------|
| ① ある         | 36% → 22% |
| ② どちらかといえばある | 45% → 47% |
| ③ どちらかといえばない | 16% → 26% |
| ④ ない         | 3% → 5%   |
- Q5. **授業中のグループ活動についてどう思いますか。**
- |                |           |
|----------------|-----------|
| ① よい           | 67% → 56% |
| ② どちらかといえばよい   | 30% → 36% |
| ③ どちらかといえばよくない | 4% → 8%   |
| ④ よくない         | 0% → 0%   |
- Q6. **授業を通じて、どんな力を身につけたいですか？（上位4位まで抽出）※複数回答可**
- |              |           |
|--------------|-----------|
| コミュニケーションする力 | 25% → 20% |
| 伝える力         | 22% → 22% |
| 英文法の力        | 15% → 18% |
| 語彙力          | 14% → 18% |

身の回りの出来事、時事問題に対する関心は、やや下降傾向である。まさに本実践そのものへの自信を問う第3問では、「できる+どちらかといえばできる」と答えた数を「どちらかといえばできない+できない」と答えた数が上回る結果となり、一部自信の落ち込みが見られた。また、第6問の推移からは、とらえどころのないコミュニケーションの力ではなく、より具体的な文法や語彙の力を重視するような傾向が見られた。概して、どの答えも大きな変化が見られる訳ではないが、根拠のない自信を持つてはつらつと前向きに取り組めた入学当初から、次第に英語表現の難しさを実感しつつある彼らの心理的背景が透けて見えるような結果となった。

## (9) 考察

まず、タイトルの分析からは、英作文のトピックを生徒にゆだねることで、彼らの社会的興味関心の広がりにつながる、とは言いがたい結果となった。News と Cases が全体に占める割合が20%まで伸びた（第3学年を対象とした）過年度に比べて、本実践ではわずか7%と伸び悩んだのは、研究対象学年の違いだけが原因ではないだろう。今年度の実践を、「生徒の主体的な取組」を奨励する方針を基本としたことで、トピック探しの方針もまた生徒の主体的な興味・関心の方向次第であった。また、教員側から積極的にトピックにニュースなどの時事問題を選ぶような声かけもしなかった。その結果、なかなか「私」中心の世界から離れることのできない高校1年生の社会への関心の低さがそのままトピックとして表れたのではないだろうか。今後は、自主、自律的な関心や行動の変化を期待しつつ、自由に書き続ける活動と平行して、他教科の学びで社会的な視座が広がる機会があれば、有機的に連動して彼らの主体性を刺激するようなやり方が必要になる。

そして今回、英語の流暢さを示す観点として Lexical Complexity（語彙の複雑さ）を利用したが、やはりこうした実践を数値化して検証することは、様々な議論があるにせよ、学びの成果が可視化され、教師、生徒の双方にとって有益だと感じた。特に生徒にとっては、定期考査では評価されない自分が書く英語の特性を知ること、ライティング活動への取組方を見直すきっかけにもなる。また、約半年の試みで、約15% (2.8→3.3)の向上が見られたのは、本実践が継続していく価値があることを十分に示す

結果だと考えている。しかしながら、彼らが書く英語の質については、記述する英単語の正確さや、そもそもの語彙の量をはじめ、多くの課題が見えた。今後も授業内容、家庭学習と強く繋げて、意識的に練度を上げるような仕掛けが必要となる。

10月の生徒アンケートからは、自由に英語で表現する活動の楽しさを感じつつ、だんだんと英語表現の多様さと自身の語彙力の乏しさを知り、苦勞する様子も見える。一方、第2回アンケートにおいても、7割程の生徒が身の回りのことや時事問題に関心を持ち続けている。自由英作文活動を楽しみつつその主体的な興味・関心を英語表現そのものに結びつけることが、本実践の最大の目標であり課題であることは今後も変わらない。第1学年から本実践を始めた意義は、その挑戦を持続可能な形で継続することにある。「どちらかといえば～ない」など、ややネガティブな回答欄に増加した約10%程度の層がさしあたりのターゲットになる。Lexical Complexity 値の開示や、ピアチェックのチェック時間や方法の調整を行い、取組に向けた意識の向上を図りたい。

#### (10) まとめと今後の展望

自由英作文が本当に自由であるためには、生徒自らが題材を主体的に探す機会が保証されなければならない。繰り返しになるが、本実践の主旨は、英語表現力の伸長だけでなく、生徒の主体的な問題発見能力の育成である。自由なタイトル選びだけでは十分にアプローチできなかった社会的視点の育成は、教科横断的な取組を積極的に取り入れて、複眼的な学びを体験できる仕掛け作りに繋げたい。また、日々の授業で磨くツールとしての英語が、社会で求められるより実践的な力に繋がると生徒が実感できるようにしなければならない。より実践的に学ぶ意識を深め、高めるためには、1教科の授業内にとどまることなく、深めたい学びの内容を複数の教科内容と意図的に重なり合わせる仕掛けづくりが必要だろう。その授業の中で生徒自身が自らの知識・技能を実践できたと感じられるならば、講義式で受動的に教わるよりもはるかに学びを深める効果があると信じている。

本当に自由な英作文活動を軸に置き、生徒の主体性に問いかけ続けることで、授業で学ぶ内容が試験のためだけのものではなく、自己表現のためのアイデアだと生徒に実感させることができるはずである。本実践を通して、相乗効果的に英語の授業が活性化することを期待している。今後は、自分たちの身の回りの「実際」を、授業の中で「実感」としてとらえ直し、自由英作文の「実践」に繋げるための試行錯誤をさらに進めることになる。

#### (11) 参考文献

- Bonzo, J.D. (2008). "To Assign a Topic or Not: Observing Fluency and Complexity in Intermediate Foreign Language Writing." *Foreign Language Annals*, 41, pp. 722-735.
- Carroll, J.B. (1967). "On sampling from a lognormal model of word-frequency distribution. In H. Kucera & W. N. Francis (Eds.), *Computational analysis of present-day American English*. RI: Brown University, pp.406-424.
- Daller, H., Milton, J. & Treffers-Daller, J. (2007). *Modelling and Assessing Vocabulary Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dickinson, Paul. (2014). "The Effect of Topic-Selection Control on EFL Writing Fluency." Niigata University of International and Information Studies. 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第17号, pp. 15-25.
- Ferreira, Daniel. (2013). "Researching the Effect of Students' Self-Selected Topics on Writing Fluency." フェリス女学院大学, 『フェリス女学院大学文学部紀要』第48号, pp. 297-306.
- Head, Philip. (2016). "Topic Selection, Feedback, and Improving EFL Writing Fluency in Japanese High School Students." *Osaka Jalt Journal* Vol. 3, pp. 19-34.

- 川上 佳則 (2018). 「自由英作文指導実践報告—問題意識の育成と発信力の向上を目指して—」『愛知教育大学附属高等学校研究紀要』第 46 号, pp.69-78.
- Semke, Harriet. (1984). “Effects of the Red Pen.” *Foreign Language Annuals*, 17, No.3, pp. 195-202.
- Sowter, Andrew, & Michael Parrish. (2013). “Does Choice of Topic Affect Writing Fluency? A Quantitative Study of Japanese University EFL Students.” *Kwansei Gakuin University Repository*, 『言語教育センター研究年報』第 16 号, pp. 53-76.
- Takinami, Wakako. (2018). “Influences of Topic Selection Methods on L2 Learners’ Writing Fluency: Replication Study.” 鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター, 『鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター紀要』第 14 号, pp. 63-78.